

史跡 唐招提寺旧境内発掘調査成果報告

(重要文化財旧一乗院宸殿ほか1棟建造物保存修理事業に伴う平成29年度調査)

奈良県立橿原考古学研究所

平成30年2月22日

調査地	奈良市五条町443-3 他
事業名	重要文化財旧一乗院宸殿ほか1棟建造物保存修理事業
事業者名	奈良県教育委員会事務局 奈良県文化財保存事務所長
調査期間	平成29年10月26日～平成30年1月25日
調査担当	調査部 調査課 主任研究員 木村理恵・鈴木一議
事業面積	1140.23 m ²
調査面積	掘削面積224 m ²
主な遺構	奈良時代末～平安時代初頭の瓦窯（1基）、中世の粘土採掘坑（11基）、 中世の南北溝（1条）、近世の南北溝（1条）
主な遺物	土師器、須恵器、奈良三彩、瓦器、陶磁器、瓦
要旨	今回の調査では、旧興福寺一乗院宸殿移築時の昭和38年に発見された瓦窯と、 それに伴う前庭部および灰原の一部を検出し、瓦窯の操業時期は奈良時代末～ 平安時代初頭と考えられる。この他、中世の粘土採掘坑、近世の溝などを検出 し、古代から近世における土地利用のあり方を明らかにすることができた。

※現地説明会の開催はございません。

I. はじめに

今回の調査は、史跡唐招提寺旧境内の御影堂（重要文化財旧一乗院宸殿ほか1棟建造物）保存修理事業に伴う発掘調査である。調査地は、唐招提寺の伽藍中心部の北方にあたり（図1）、絵図等の資料から、近世には能満院があったことが知られる。昭和37年から昭和39年にかけての旧一乗院宸殿移築工事の際、瓦窯1基が発見され、発掘調査が行われた。

なお、昭和38年の発掘調査の際、瓦窯の自然崩壊を防ぐため、関西大学教授大岩正芳氏に委託し、瓦窯全体に樹脂を塗布して硬化させる保存処置がなされた。50年以上経過した現在でも保存処理の効用が保たれており、瓦窯保存に尽力した成果といえる。

本調査は、旧一乗院宸殿修理に伴う現状変更の許可条件として、事前に実施した発掘調査である。そのため地下遺構に影響が及ばないように地中梁を設計するためのデータを得るために限られた範囲・掘削深度での調査であったが、さらに旧地形の復元、瓦窯が複数基存在したかどうかの確認、瓦窯の年代を把握することを目的として調査を進めた（図2）。

II. 発掘調査の成果

本調査地における基本層序は、現地表から旧一乗院宸殿移築時の造成土、近世・近世以降の造成土、中世の遺物包含層、古代の遺物包含層、地山である。調査地周辺は西南方向が高く北東方向に向かって低い谷地形であることや、中近世以降における塔頭の建立や旧一乗院宸殿の移築に際しても、北東方向に盛土が施されたことが、調査区断面の観察からわかった（図3）。今回の発掘調査の結果、瓦窯関連の遺構として、新たに前庭部と灰原の一部を検出した。瓦窯の廃絶後の遺構としては、中世の粘土採掘坑を数基、近世の南北溝も検出した。

古代の遺構

瓦窯（写真2・3・5～7） 昭和38年の発掘調査では、すでに焼成室の上半部は破壊されていたこともあり、側壁から下部のみの検出で、煙道は確認していない。瓦窯の焚口から焼成室奥壁までの長さは4.2mで、半地下式の有畦式平窯である。地山を掘って燃焼室・焼成室を構築しており、平面調査でも掘方が確認できた。焚口は、幅0.5m、高さ0.5m、長さ0.65mで、底部には表面が平坦な石材を敷き、左右に各1石ずつ立て、その上に1石を横架し、天井を構築する。燃焼室は、幅1.9m、長さ1.65mで、左右側壁を基底部に石を並べてその上に平瓦を積み上げ、表面に粘土を塗って壁面を作る。東側壁の構築材は、重郭文軒平瓦1点含む平瓦を使用している。東側壁は、西側壁に比べ構築材である平瓦の小口面が不揃いであること、また東壁付近の床面には炭層が堆積し、東壁基底石の下にも炭層が続くことから、東側壁は操業当初のものではなく修復したものと評価できる。焼成室は、最大幅2.2m、長さ1.9mで、底部付近の高さ約0.4m分のみが残存し、側壁・奥壁はほとんど残存していない。平瓦を積み上げた4条の畦（幅約0.25m）を有し、火道

を5条通す構造である。

瓦窯前庭部と灰原 (写真2・4) 瓦窯のすぐ北西側は、地山を掘り込み前庭部とする。最終操業時に堆積したと考えられる灰原と地山の間には遺物包含層があり、何度か平坦面を作り出している。一方、瓦窯の東方も地山を削って前庭部を作るが、後世の削平が著しく、西方ほど残りはよくない。瓦窯東側トレンチ(北)で確認した地山直上の層(図4-第2層・第3層)は、瓦窯の操業前後に堆積したと考えられる。第2層からは土師器・須恵器・奈良三彩・軒丸瓦など8世紀後半から9世紀初頭の遺物が多く出土した。また、②トレンチ中央区で確認した灰原(図5-第1層)出土の土器・瓦もほぼ同時期のものである。したがって、瓦窯の操業年代は奈良時代末から平安時代初頭と考えられる。

中・近世の遺構

粘土採掘坑 (土坑1～11) (写真8・9) 本調査では土坑を11基確認した。規模は、2m四方の土坑が多い。⑥トレンチで検出した土坑は、全て下部のみが残存しており、上半はほぼ消失し、その後の造成土で埋没している。出土遺物等から中世以降のものであり、いずれの土坑も地山の粘土を採掘するために掘られた粘土採掘坑と考えられる。土坑1のように、窯周辺の良質の粘土(地山)を採掘するため、固く焼き締まった窯周辺の被熱土を避けて、下方に粘土をえぐり取ったため上方がオーバーハングする土坑もみられる。

南北溝1 (写真10) 調査区西辺で検出した検出長約7m、最大幅2m、深さ5～40cmの溝である。地形に沿って南西から北東方向へと流れるような傾斜をもつ。出土遺物の観察から、14世紀代の溝と考えられる。

南北溝2 (写真11) ⑥トレンチ南方で検出した検出長約8m、検出幅約0.8m、深さ約30cmの南北溝である。出土遺物から、16世紀後半～17世紀前半の溝と考えられる。

旧地形 調査地の南方では地表下5cm前後と比較的浅い位置で地山を確認できるが、北にいくほどより深くなり、近世から現代までの盛土が厚く堆積している。しかし、⑥トレンチ付近で多く粘土採掘坑がみられることから、中世段階までは少なくとも⑥トレンチの北端付近まで地山が南側と同じような高さで続いていたと推測できる。したがって、瓦窯が築かれる以前の旧地形は、調査地北東部にも地山が張り出しており、その地山を掘り込むようにして、瓦窯の東側前庭部も構築されていたと考えられる。

III. まとめ

調査地付近は、西の京丘陵から東へ派生した尾根の東端に位置する。過去に調査・保存されていた瓦窯は、その尾根の北斜面に構築されたものであることが明らかになった。また、今回の調査では新たな瓦窯が確認できなかったため、1基単独の操業であったと推定する。瓦窯の操業年代は、奈良時代末から平安時代初頭である。

その他の成果としては、中世の粘土採掘坑を数基確認した。『大乘院寺社雑事記』に記載される通り、唐招提寺周辺の西の京丘陵東麓では良質な粘土が採土されていた。近世の南北溝2は、近世初頭の溝であり、能満院に関連する遺構の可能性が考えられる。



写真1 唐招提寺一乗院宸殿・殿上及び玄関跡（南から）



写真2 瓦窯と灰原（北から）



写真3 瓦窯（南から）



写真4 ②トレンチ中央区 灰原検出状況（北から）



写真5 瓦窯焼成室畦（北から）



写真6 瓦窯焼室 東側壁（西から）



写真7 瓦窯焚口（南から）



写真8 ⑥トレンチ 土坑3（北から）



写真9 ⑨トレンチ 土坑11（北から）



写真10 ②トレンチ 南北溝1（南から）



写真11 ⑥トレンチ 南北溝2（南から）

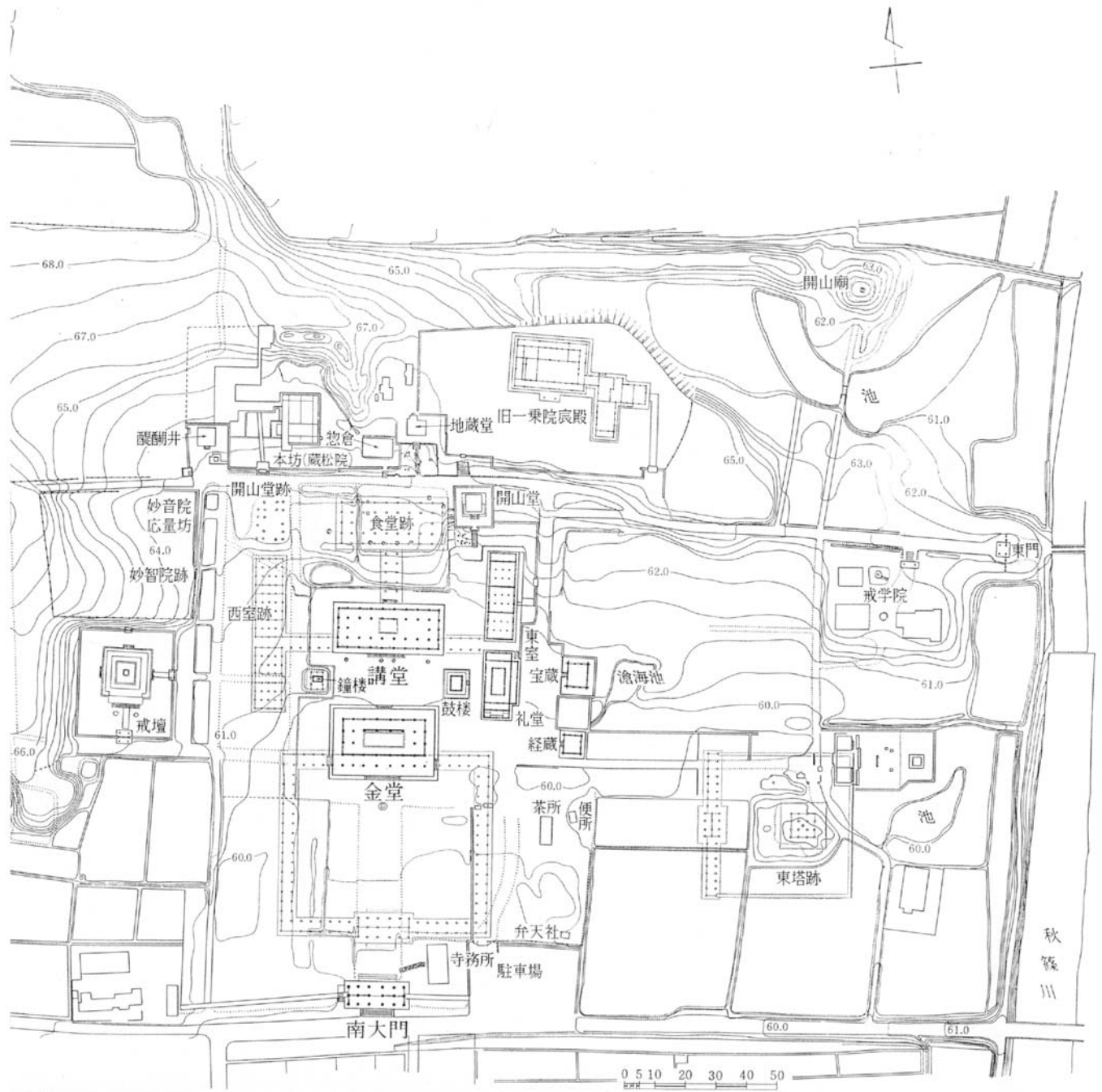


図1 唐招提寺伽藍図(1:2000)

『奈良六大寺大観 第十二巻 唐招提寺一』より転用

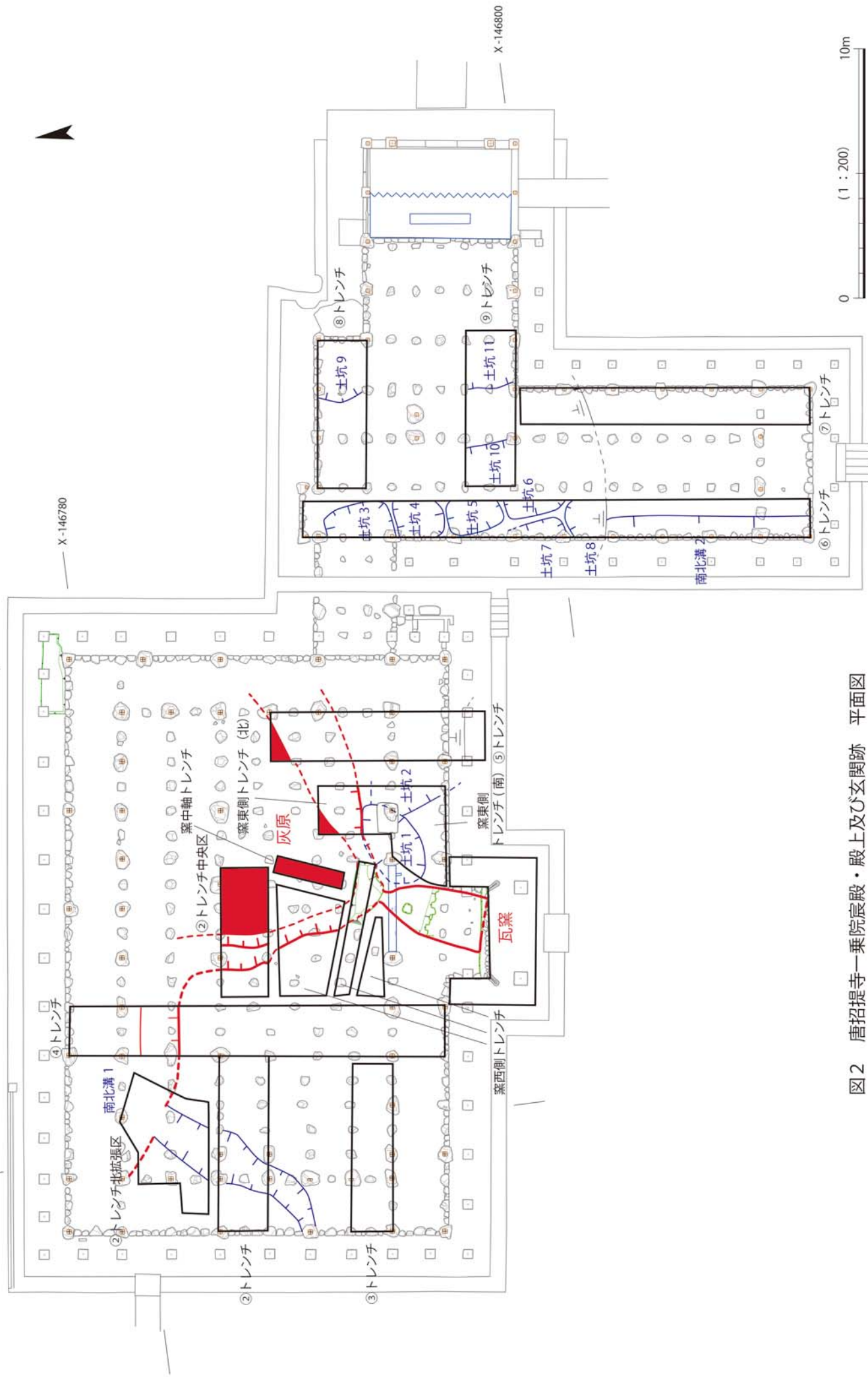


図2 唐招提寺—乗院宸殿・殿上及び玄関跡 平面図

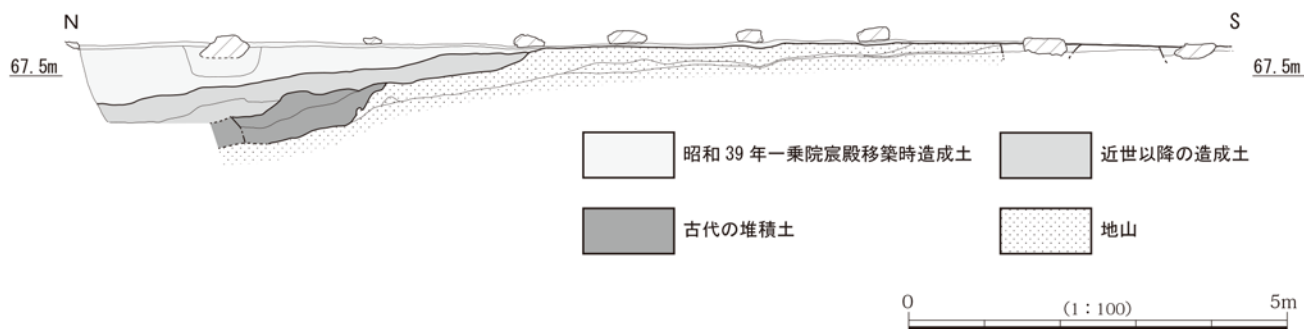


図 3 ④トレンチ 東壁断面図

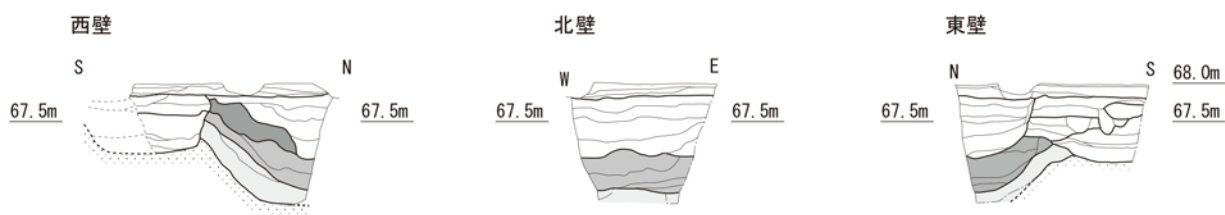


図 4 窯東側トレンチ（北）断面図



図 5 ②トレンチ中央区 南壁断面図

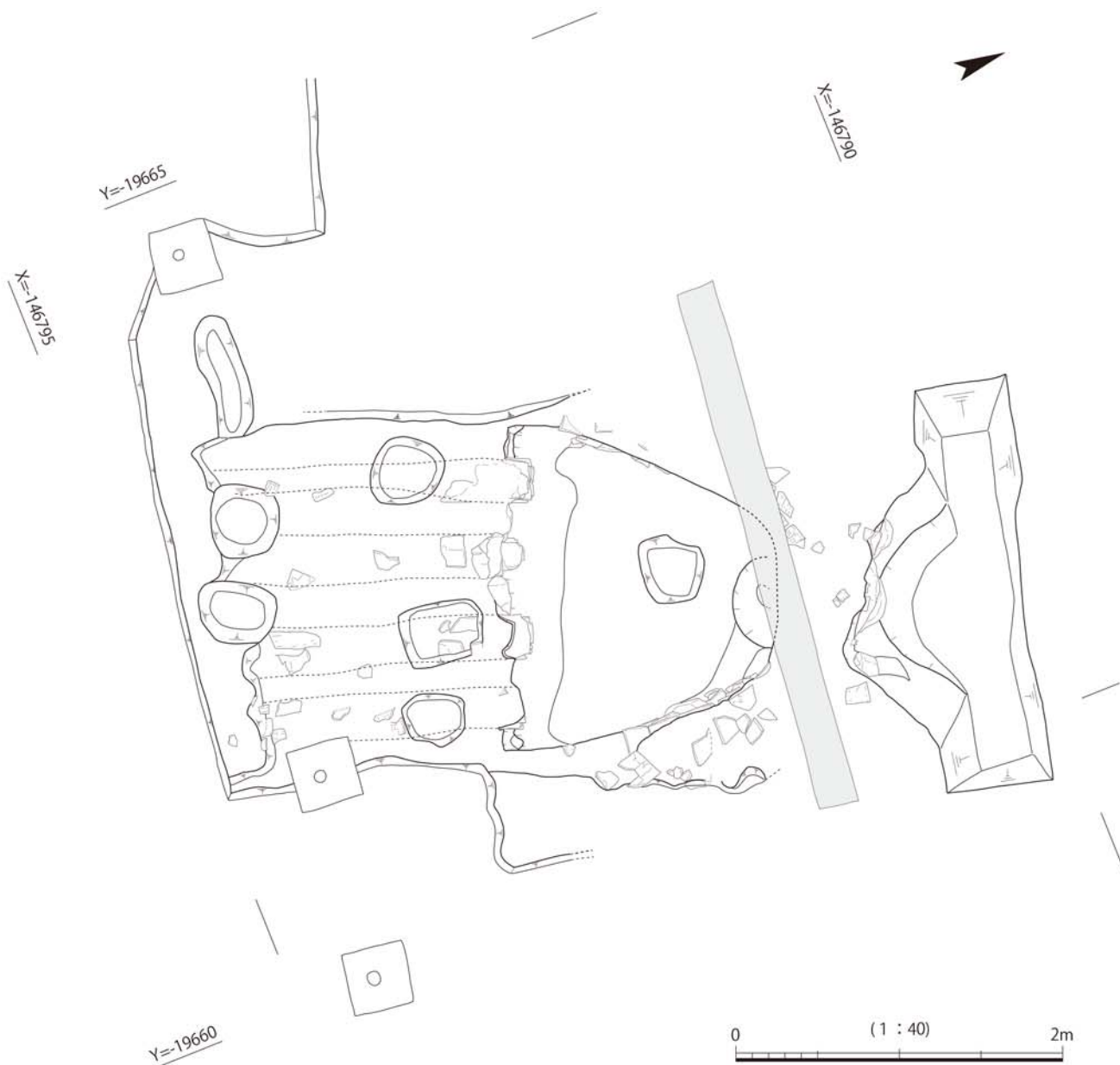


図6 瓦窯平面図

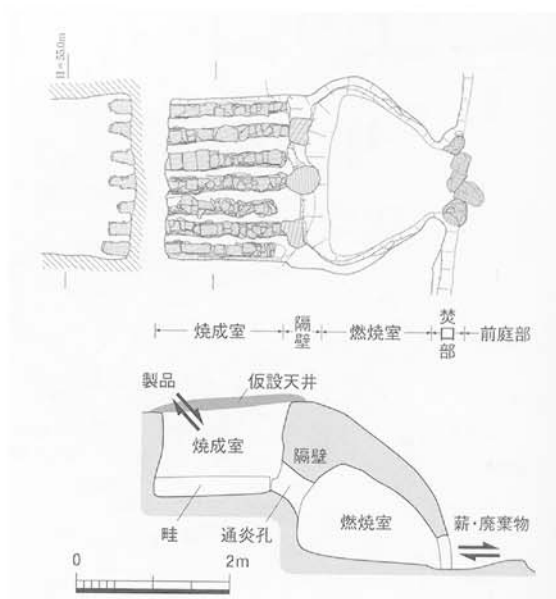


図7 有畦式平窯の構造

(文化庁文化財部記念物課 2013 『発掘調査のてびきー各種遺跡調査編一』より)

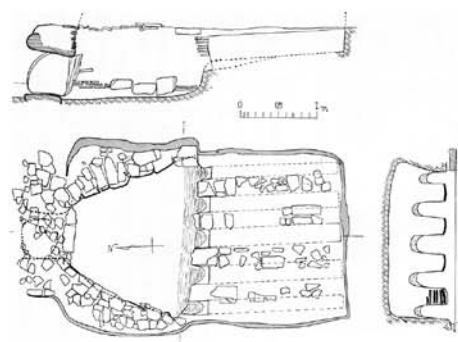


図8 瓦窯平面図・断面図

(奈良県文化財保存事務所 1964

『重要文化財 旧一乗院宸殿・殿上及び玄関移築工事報告書』より)